

三月十二日

朝、世田谷村地下MEETING。

午後隅田川スーパー<sup>ゼロ</sup>ハウス見学と学習。川合健二との遭遇以来のセカンドコンタクトかも知れない。

夕方、新宿の病院に渋井さんお見舞。B型肝炎だそうで僧侶の頭をそるカミソリからの感染かも知れぬと言う。感染も一つのコミュニケーションなのだから現代の複雑さの現れかも知れない。

三月十三日

北九州早稲田研究所、第一回会合。古市徹雄、坊城俊成、若松研究所社長、高木正三郎、野村、森川、石山。これに李祖原、張永和、ヨルク・グライターが加わって、実質的運営メンバーが勢ぞろいだ。研究環境は著しく劣悪だが、最悪の状態から頑張ってみるのも一興だろう。

夕方、北九州市役所。高木の車で佐賀へ。途中、落日が美事だった。九州の空の様子はやっぱり東京とはちがうなと実感する。

夜、佐賀着。ホテルニューオータニで食事。

三月十四日

昨日「室内」「スタジオボイス」二本原稿書く。我ながらはかどった。隅田川のミニマムハウスについて書く。<sup>ゼロ</sup>プロジェクトの具体的指針を得たように思う。

朝から早稲田パウハウス開校準備に追われる。有明海沿いの「堀干しプロジェクト」サイトを見学。海風が気持ちよい。少し年をとって山から海へと志向が傾いてきているのだろうか。ただただ体力が落ちているだけの事かも知れない。海を眺めているのに体を動かす必要はない。山岳は体を動かさないと眺望も得られないから。要するに感傷は禁物である。三年目にして佐賀の空気に慣れこんできたのだろう。

夜、会食の席で、TOKYOスクールのプランの骨子固まる。どうやら自分は沈黙考型の人間ではない。人と会って、飯を喰って雑談している時に良いアイデアに出会うタイプの、つまり雑談型宴会型の人間らしい。俗人であるという事でもある。

八〇歳以上の人間、つまり人生の達人ばかりをそろえたスクー  
ルを開校してやろう。

六月GA、十一月TOKYO GAS。磯崎さんに大野一雄を紹介していただく。武基雄さんにはクラスメート立原道造を語ってもらおう。太田博太郎、石元泰博、松原泰道、各氏の名が挙がる。すぐにも動き始めなければならない。老人老婆を主役にして、磯崎、山口勝弘、栄久庵憲司諸氏等はまだ若手で出演できないと言う構図だ。コリヤ、面白いぜ。四〇、五〇はまだ鼻垂レで、ましてや三〇代なんて者はミジンコであって、姿形も視えないのだと言う事をハッキリさせてやろう。